

特別寄稿

奄美島唄の系譜を探る方法

小川 学夫

Ways of Researching the Genealogy of Amami Ōshima's Traditional Shima-uta Music

Hisao Ogawa

奄美の島唄は、奄美で生まれ、ほかの唄の影響を全く受けずに伝承されてきたものは皆無と言ってよい。いつの時代か、沖縄や本土から流行の波に乗ってやってきた唄が結構多いし、奄美の中で生まれたとしても、時代とともに目まぐるしく変わったもの、また集落を出たり、集落に入ってきて変化した唄もある。「系譜を探る」というのは、正に唄の素性、交流の過程をたどるという作業だが、本稿では「曲名」「歌詞と詞形」「歌詞反復」「ハヤシコトバ」の4要素から、探求の方法を考察する。

Key Words: [奄美島唄] [曲名] [曲詞と詞形] [ハヤシコトバ] [歌詞反復]

(Received September 24, 2019)

〔目次〕

はじめに・凡例

1. 曲名
2. 歌詞と詞形
3. 歌詞反復
4. ハヤシコトバ

おわりに

はじめに

私は、1981年に『奄美の島唄～その世界と系譜～』（根元書房）という小著を出したが、最近、その改訂版を書こうと思った。この本は、奄美諸島に伝わる島唄の1曲1曲を解説したものなのだが、そこで気になっているのが、この本のサブタイトルにある「系譜」という言葉である。私にとって問題なのは、この本において、各曲目の系譜を十分に、誰にも分かりやすく立証できているかということである。

* 鹿児島純心女子短期大学名誉教授

考えてみると、これまでの私は、島唄の系譜調べをかなり熱心にやってきたという思いはあるが、系譜調べの方法論をまとめて書いたことはない。言ってみれば、その方法について自分なりの検証を本腰入れてしたことがないという反省だが、今回その責任を果たそうと思う。

ここで、唄の「系譜調べ」とはいったい何かということについて触れておかなければならない。一口で言うなら、唄の1曲1曲が、どういう素性を持つか、つまりほかの唄とどう関連しているのかを調べることである。生物学で言えば、新しい生き物を見つけた場合、先ずそれがどの種、どの属に該当していると確定する作業を行うはずだが、それと同じ仕事だと言ってよいであろう。

島唄の場合、同じ土地にありながら、Aという唄とBという唄が曲名も旋律の印象もかなり異なりながら、調査、分析、比較の結果、一つの系譜に繋がると判断できる場合がある。いずれにせよ、研究者にとってはスリリングな作業であるが、曲の印象だけで強引に繋げてしまうと誤りを犯すことが多い。以下、目次にあげた4項目を点検し、その有効性や誤りの例を述べておきたいのである。

ただ、音楽的な要素、条件については、項目をあげなかった。私自身、音楽が専門ではないのと、「印象」はやはり印象に過ぎないからである。とは言え、Aという曲とBという曲を、音楽として耳から聞いた印象が系譜調べに有効な場合がある。科学的ではないと言われるかもしれないが、無視できるものでもない。私の経験から言って、系譜調べの多くは唄の印象から始まっている。結論的には、似ていても違う系譜の唄だというものがあったし、逆に、音楽面から似ても似つかない唄同士が、明らかに同じ系譜の唄だというものもあった。従って、本稿でも、系譜調べの第一段階として音楽的印象については遠慮なく記させていただくこととした。

〈凡例〉

- 「奄美島唄」という言葉の定義は、集落により、または地元の人か外来者かによって定義が異なるが、神唄、童唄を除いた奄美の島々で歌われる唄全体を含めた。その中のジャンル名については、一般的な用語を使った。
- 何のこともない場合、加計呂麻島、請島、与路島を奄美大島に含めた。
- 唄の詞章（歌詞と反復とハヤシコトバ）を掲載するに当たって、歌詞はひらがな、ハヤシコトバはカタカナにして、その頁の左方に記し、右側には歌詞の共通語訳を付した。
- 歌詞、ハヤシコトバ等の発音表記は、引用文献通りとしたが、特殊記号は割愛した。
- 文献からの引用については改行など体裁を変えたものがある。共通語訳については著者ないし編者の見解を大切にしながら、筆者がまとめた。
- 引用文献はできるだけ、楽譜が付いたものや、音源の所在がはっきり明記されたものを使った。なお、引用頻度の多い下記文献は、〈 〉のように略記した。

『南島歌謡大成 奄美編』（田畑英勝、亀井勝信、外間守善編 角川書店、昭和54年刊）：〈大成 奄美〉

『奄美の島唄 歌詞集』（恵原義盛著 海風社、昭和63年刊）：〈恵原 奄美〉

『日本民謡大観（沖縄 奄美）沖縄諸島篇』（日本放送協会編 日本放送出版協会、平成3年刊）：

〈大観 沖縄〉

『日本民謡大観（沖縄 奄美）奄美諸島篇』（日本放送協会編 日本放送出版協会，平成5年刊）：

〈大観 奄美〉

『奄美民謡総覧』（セントラル楽器奄美民謡企画部編 南風新社，平成23年刊）〈総覧 奄美〉

1. 曲名

最初に研究上の手続きとして、島唄の曲名がどのような方法で付けられているか代表例をあげておきたい。

①歌われる代表的な歌詞の頭の部分、まれに歌詞の一部をとって曲名としたもの。

奄美の島唄は、今でも曲と歌詞が固定的なものではない。極端に言えば、一つの唄に、詞形さえあればどんな歌詞を歌ってもよいのである。その理由は、かつての島唄では複数の人がいるような歌詞を歌って、いわゆる掛け歌をしたからである。掛け歌とはつまり、唄問答のことで既成の歌詞を使ってもいいし、その場で即興で歌っても、とにかく唄が続くかぎり、何首も歌われた。ただ大方の曲には、打ち出しの歌詞が大体決められていたようで、それを曲名とすることが多かった。現在は掛け歌で歌われる機会はほとんどなくなったが、奄美の場合、実際にその歌詞がほとんど歌われなくとも、曲名として残ったものも少なくない。

例はいくらでもあげられるが、奄美大島では小学生でも知っている「行きゅんにゃ加那節」は

いきゅんにゃかな	行ってしまうのですか、愛しい人
わきゃこうとうわすれて	私のことなど忘れて
いきゅんにゃかな	行ってしまうのですか、愛しい人
うったちやうったちゅっか	立とう立とうとしますが
いきぐるしゃ	行ってしまうのがつらくてなりません

* 〈恵原 奄美〉316頁

という、歌詞からとられている。

②曲に出てくるハヤシコトバを曲名としたもの。

大方の島唄には、多くハヤシコトバがついているが、その一部をとって曲名にしたものである。中には、一つの曲でありながら、歌詞から付けられた名前とハヤシから付けられた2つの曲名を持っている場合がある。例として「船の高たか艦ども（外艦とも）節」一名「ヨイスラ（スラヨイとも）節」があげられる。

ふねのそとどもに	船の高艦（舳先）に
しるどりぬるしゅり	白鳥が止まっている
しるどりやあらぬ	いや、白鳥ではない

をなりかみがなし をなり (姉妹) の神様だ ※「がなし」は尊いものに付ける接尾語
* 〈同上〉 311頁

という歌詞が反復して歌われ、この合間合間に「スラヨイスラヨイ」「ヨイスラスラー」といったハヤシコトバが入るのである。

③唄の場、目的等からつけられたもの

人を港などに送るために歌う「送り節」、豊年祭り等で歌われたことを示す「豊年節」、婚礼で花嫁が婿方に移動する「道唄」等々があげられる。

さてここから、具体的に曲目の比較による系譜の調べ方について述べる。ともかく、同じ曲名が出てくると、多少曲の印象は違っても、同じ系統の唄でないかと考えるのは自然である。しかし、それほど多くはないが、同曲異名もあるので注意しなければならない。

同名異曲、奄美大島と徳之島の「はやり節」の例

奄美大島に「朝花^{あさばな}節」がある。この唄が島中に流行した時期があり、「朝花はやり節」とも言われた。昭和8年に出版された文潮光著『奄美大島民謡大観』には「朝花流行節」として紹介されている。

あさばなはやりぶし 朝花はやり節
はやりぶしにちゆるむんや はやり節に似たい曲は
ねんどねんど ないよ、ないよ
* 135頁

のような歌詞が最初に出てくるが、実際には「朝花」が抜かれてただ「はやり節」というだけの曲名も使われた。

一方、徳之島にも、かつて大流行したために、「はやり節」と名付けられた唄があった。これは地域により「にあがり節」「犬田布節」「道節」「井之のいび加那志」、さらに奄美大島では「徳之島節」、沖永良部島では「犬田布節」と言われて、その分布圏も広い。しかしながら、両曲とも「流行した」という事実だけで、曲の間にはなんら関係は見いだせない。繰り返すが純然とした別曲である。

ついでながらも一例、奄美大島では「朝花」を「ちゅっきやり朝花」というところがあり、この「朝花」が消えて、ただ「ちゅっきやり節」というところがある。「ちゅっきやり」とは「短い切れ」という意味で、これは唄のいわば形状ともいえる。また、奄美大島では歌詞反復して歌う「長朝花節」といわれる同系曲もあるから、「ちゅっきやり節」には、短かく歌う唄という意味が込められている。

もう一曲「ちゅっきやり節」という唄がある。これもかつて徳之島で大流行し、奄美中、いや島外でも歌われた歌だが、特に他地では「徳之島ちゅっきやり節」といわれている。流行し

た背景は、

わったりだんごくわすて	私ら二人談合（相談）して
なぜかちひんぎろや	名瀬まで逃げようよ
なぜやしまちきゃさり	名瀬は島が近いから
かごしまひんぎろや	鹿児島に逃げようよ

*前掲『奄美大島民謡大観』389頁

のような駆け落ちを歌った文句がうけたからであろう。これらも、曲の歌詞、詞形などを考慮しなければ、同じ系譜の唄ととられかねないものであった。

証明が難しい同名曲、奄美大島と徳之島の「朝花節」

同名曲でも、すぐに別系譜の唄であることが分かる一方、同系譜の唄だとすぐに判断できないものがある。私が奄美大島と徳之島の「朝花節」に初めて出会った時がそうであった。

奄美大島の「朝花節」は、ただ不定型歌詞を反復なしで歌う形の短い「朝花節」と8886の琉歌調歌詞を複雑な反復をしながら歌う「長朝花節」とがある。一般に唄の出る席で、声慣らしのように歌うのが「朝花節」である。すぐ前に扱ったように、「はやり朝花」とか「はやり節」「ちゅっきゃり朝花」とか「ちゅっきゃり節」と言われるのが正にその唄なのだが、ここではもっぱら短い「朝花節」を問題にし、長い「長朝花」は扱わない。徳之島には「長朝花」に当たるものがないからである。

先ず奄美大島の方からあげる。

「朝花節」宇検村屋鈍出身 吉永武英歌唱

ハレー

あさばなはやりぶし	朝花はやり節
うたぬはじまりや	唄の始まりは
あさばなはやりぶし	何と言っても朝花はやり節だ

*〈総覧 奄美〉127頁

この唄は、どの歌い手でも、「ハレー」「ヨーハレー」「ハレーカナ」などのハヤシコトバから始め、3句形（ABC）の不定形歌詞が歌われる。このABCは、例外はあるが大方がこの歌詞のようにA句とC句が同じ文句である。歌詞内容は、かつてこの唄で掛け唄をしたといわれるが、挨拶から恋歌、教訓歌、世間の噂を歌ったものなど極めて多様である。

その後、私は徳之島にも「朝花節」があることを知ったのだが、徳之島では各集落によって、節回しはかなり違い、全体的にもなかなか奄美大島の「朝花」とは同じ唄には聞こえなかった。そのため、同名異曲だと思い込んだ時期があった。曲名としては「朝花」の前に、それを伝える集落名が入ったり、「島朝花」といって奄美大島の「朝花」と区別していたが自分の集落で歌うときは、「朝花節」で通じていたものである。

徳之島では、奄美大島とは歌われる歌詞も異なり、琉歌調歌詞とともに、奄美大島のように不定形歌詞も歌われるのである。その例をあげよう。最初は8886調歌詞、あとは自由形のものである。

遊び唄「井^い之朝花」 徳之島町井之川出身 前田政為歌唱

エーイ

くくぬるいぬうちいなん	ここの家の内で
ゆゑえくぬでいうきいば	お祝いを好んですれば
ちいきぬたちがわりい	月の立ちがわりに
うゆゑえぐとうばかり	お祝いごとばかりが続く

* 〈大観 奄美〉609頁

遊び唄「朝花節」(歌詞のみ) 徳之島町母間 實壽當歌唱

あさばなぐわとおうたむんやねん	朝花節と同等のものはない
なんでゆあかしうとてんま	何と夜明かしして歌っても
あさばなぐわとうおうたるむんやねん	朝花節と同等のものはない

* 〈大成 奄美〉517頁

中には、不定形歌詞と定型歌詞を同じ節で器用に歌う人もいないではない。

さて、曲の印象がかなり異なることは先にも記したことだが、私が驚いたのは徳之島の亀津で聞いた「亀津朝花」の歌詞であった。なんと「朝花」という文句が出てきたのである。

徳之島の遊び唄「亀津^{かむいじ}朝花節」 徳之島町亀津出身 福田喜和道歌唱

エーヘーイ

あさばなにふりて	朝花のような娘に惚れて
わきゅやふいすててい	本妻の私を振り捨てたが
花ぬさおれれや	その花が萎れた時には
わきゃくとおもぶしゃれ	また、私のことを思って下さい

* 〈総覧 奄美〉79頁

実は奄美大島の「朝花節」ではこの歌詞はあまり歌われることがなかったようで、今でも「朝花」の曲名由来として定説のようにになっているのが、島唄研究の草分け的存在だった文潮^{かざり}光氏の説である。「曲名の朝ばなは、朝の入り口朝の始まりで夜あけ、れい明という意味を持ち、やがて事の初まりといった意味にも発展したようである」と自著『奄美民謡大観 改定増補版』(自家版、昭和41年刊)187頁に書かれている。その説は、岩波文庫の『日本民謡集』(町田嘉章・浅野建二編 岩波書店、第1刷昭和35年刊)にも踏襲されている(389頁)。

奄美の島唄の場合、どのような命名がなされているか、先に、その唄に歌われる代表的歌詞の頭からとられることが多い、と書いた。その点から言えば、「朝花」から始まる歌詞があっ

たとえるのが自然である。曲の意味は、人々のイメージとはかなり違って、朝の花のように若く、かつ貞節心の浅い女性だということになる。

その後、諸文献に当たって、奄美大島でも、喜界島でもこの歌詞が「朝花節」で歌われていたことを知った。本田安次著『奄美の旅』（民俗芸能の会、昭和39年刊）192頁や、三井喜禎著『喜界古今物語』（自家版、昭和40年刊）300頁がそうである。

これだけの条件が加われば、奄美大島、喜界島、徳之島の「朝花節」は同じ系統であるとしか言えなくなった。

さらに、もう一件、打ち出しの「ハレー」といったハヤシコトバが、かつて、掛け唄（唄問答）が盛んな時代「ハレー」と言いながら次の歌詞を考えただという古老の話を思い出した。確かに、朝花は掛け唄に用いられた歌と言われており、なるほどと実感したものである。

2. 歌詞と詞形

1で述べたように、曲名と歌詞とが密接に結びついており、系譜を探るのに重要な条件になることは確かである。しかし、奄美の場合は掛け唄が基本であったので、詞形さえ合えば、1つの歌詞がどんな歌でも歌える可能性がある。従って、同じ歌詞が出てきたからと言って、同系譜の唄とは限らないし、逆に全く違った歌詞が出てきたからと言っても、別曲でない場合もあるわけである。

ここで、奄美大島の代表的詞形をあげておく。

①8886調（琉歌調）は、奄美、沖縄を通して代表的詞形と言える。これに準じた8888調が時々あらわれるが、これは字余りというより、琉歌調の一つ昔の詞形だと私は考えている。

なお、全てが、上の句下の句に分かれていて、唄によって上と下が同一旋律か、違う旋律かに分かれる。いずれにせよこのことは、系譜を考えるのに重要である。

②7775調（近世小唄調）は本土系の民謡がほとんどこの詞形であるが、奄美の場合も、もしこの詞形の唄が出てきたら本土にルーツを持つ唄と考えてよい。

③585調（ABC）ないし686調に近い文句が、一部変形されて組み合わせたり、曲固有の詞形となる。これは、実例を示す方が分かりやすい。なお、AとCはほとんど同じ文句だが、わずかに別の文句が出てくる場合もあるので、歌詞反復とはみない。

さて、曲目によっていかなる詞形になるのかを例示する。

i形「くるだんど節」「ちょうきく女節」「いそ加那節」など=585・585の6句体歌詞（ABC・EFG）

例 「くるだんど節」

くるだんど	A 空が黒ずんできた
あまごいねがたっとう	B 雨乞いし願ったら
くるだんど	C 空が黒ずんできた
ういかりまえ	D 喜びだ
しまじゅぬちゅんきやぬ	E 島中の人たちは

ういかりまえ F 喜びだ
* 〈恵原 奄美〉117頁

ii 形「いんみやんめ節」「行きゆんにゃ加那節」「数え歌」など=585・85の5句体歌詞 (A B C・E F)

例 「いゆんめやんめ節」

いゆんめやんめ A いゆんめ (あだ名) 兄さん
めはなばきれたる B 目鼻がなくなった
いゆめやんめ C いゆんめ兄さん
なばんかさいじとて D 南蛮瘡 (梅毒) が出て
からしゆかて E 塩辛を食べたので

* 『奄美大島民謡大観』(文潮光著 自家版, 昭和8年刊) 196~7頁

iii 形「くるだんど節」変種=5885・5885の8句体歌詞 (A B C D・E F G H)

例 はなぬさきゆり A 花が咲いている
みきよやまさくなんや B 三京山の迫に
せんねんからさちみらん C 千年前から咲いたことのない
はなぬさきゆり D 花が咲いている
なをそなをそ E 移そう移そう
あけてのにさんがち F 明けての二, 三月には
わきゃやぬにわかち G わが家の庭まで
なをそなをそ H 移そう移そう

* 〈恵原 奄美〉119頁

i 形の変種としか言えないものであるが, i 形とiii形の節回しはそれなりに異なる。今はこの詞形の歌詞が多くなった。歌い手は8音一句で物足らなくなりこのような長い詞形を作ったものと考えられる。

ついでながら「A B C D・E F G」と「A B C・D E F G」の7句体歌詞も存在するが, 例示は省略する。共に「くるだんど節」だけで歌われる詞形である。

④「朝花節」「かんつめ節」「こーき節」等=不定形歌詞

不定形歌詞は大方曲が決まっていて, 1つの歌詞が複数の曲で歌われるものは先ず存在しない。

以上を踏まえて, 実際的な系譜調べに入ろう。

奄美から沖縄に渡った唄、奄美の「諸鈍長浜節」と沖縄の「諸屯節」の関連

奄美には沖永良部島を除いて「諸鈍長浜節」ないし同系譜の唄がある。そして、奄美大島、喜界島、徳之島には三味線を伴奏とする遊び唄以外に八月踊りの唄としても「諸鈍長浜」が存在する。歌い方はほとんど一緒だが、節回しは幾分異なる。

「諸鈍」は加計呂麻島の太平洋に面した、今は小さな集落の名だが、かつて沖縄に属していた、いわゆる「那覇の世」といわれた時代は、奄美の都のような存在だったと言われる。今日、国指定の文化財の民俗芸能「諸鈍しばや」でも知られる。「諸鈍長浜節」がいつごろ出来たのかは不明だが、奄美中に知れ渡ったことは、もともと「諸鈍」自体が広く知られていたということであろう。

ここに歌われ方と、諸鈍が出てくる歌詞をいくつか挙げてみる。

奄美大島の遊び唄「諸鈍長浜節」瀬戸内町諸数出身 武下和平歌唱

しょどんながはまに	諸鈍長浜に
うちゃげひくなみや	打ち上げては引く波は
ヒヤルガヘー、	
ハレー	
しょどんみやらべぬ	諸鈍女童（娘）の
わらいはぐき	笑った時の歯茎のようだ
ウセヒヤルガヘー	

* 〈総覧 奄美〉40頁

琉歌調歌詞が歌われること、「ヒヤルガフェー」系のハヤシコトバが歌われることが特徴である。

節回しにはかなりの違いがあるが、奄美各地で歌われている。ここで問題としたいのは、与論島の「しゅごうなかだわ珠壕中棚節」という遊び唄である。これまで、あまり言われてこなかったが、川村俊英著『与論島の民謡と民俗』（自家版、昭和59年刊）にこの唄の詳しい解説が載っている。歌われ方は、〈大観 奄美〉からとるが、次のようなものである。

与論島の遊び唄「珠壕中棚節」与論町茶花出身 川村俊英伝承

しゅごーぬなかだなや	珠壕の中棚（地名）は
わがはゆていあたり	私が通っていた
ヘンヨーヨー ヌーガーヨ ウッシー	
わがはゆいぬやしゃぬ	私が通わなくなったら
ぬーだきなち	ぬーだき（雑草名）だらけになった
ウッシーヘンヨー ヌーガヨー	
マタガディ ヘンヨーヌーガヨー	

* 同著713頁。注に第2,4番のハヤシコトバは、「ヌガヒヤルヘー」と歌われたとある。

注の通りだとすれば、先のハヤシコトバ「ヒヤルガヘー」と明らかに繋がってくる。また、『与論島の民謡と民俗』の解説では、昔は与論でも「諸鈍長浜節」が歌われており、「諸鈍長浜ぬ～」の歌詞が歌われていたという。以下は与論化した歌詞である

いちよーきながばまや	いちよーき長浜に
うちゃいひくなみや	打ち上げては引く波は
あがさめーらびぬ	赤佐（与論島内の地名）娘の
みわれはぐき	笑ったときの菌茎のよう
* 同著593頁	

「諸鈍長浜」が「いちよーき長浜」に、「諸鈍娘」が「赤佐娘」に変っただけである。

ここで沖縄でよく知られた古典「諸屯」との繋がりに問題を移す。私が長い間、この唄を「諸鈍長浜節」と系譜が同じだと言えなかったのは、踊り歌としての「諸屯」に「諸鈍」が出る歌詞がなかったことである。

ちなみに、宜保英治郎著『琉球舞踊入門』（那覇出版、昭和59年刊）によれば、「諸屯」の踊りは出羽の曲「仲間節」、中踊りの曲「諸屯節」、出羽の曲「しょうんがない節」となっており、琉舞「諸屯」の歌詞は、次のようなものである。

まくらならべたる	かつて枕を並べて過ごした
いみぬついでなさよ	その夢のつれないこと
サトヌシヨー	
つきやいりさがてい	もう月は山の端に入って
ふゆのやはん	冬の夜半になった
アリサトヌシヨー	
* 同著38～42頁 原文では、ハヤシコトバは（ ）で括弧である。	

全く、諸鈍の匂いすら感じられない。

しかし、実際には同著の説明に、「諸屯」の本歌は「諸鈍長浜に打ち上げ引く波や～」の歌詞であると書かれていることが分かった。さらに、南島古謡を集成した『日本庶民生活史料集成第十九巻』（谷川健一編集委員代表 三一書房、昭和46年刊）によって18世紀末、首里王朝で編纂された文書『琉歌百控』を精査したとき、このなかに「諸鈍節」があり、「東間切之潮殿村」という注記と、

しゅとん宮童の雪色の断
いつが夜の暮て御口吸わな

しゅとん長濱に打ち引波や
しゅとん宮童の目笑断

の2首が出てきた(358頁, 古典であった表記は原文通りとした)。私はこれでやっと満足したのであるが、最初の印象と覚え込みは唄の系譜調べには非常に危険だという教訓である。

ここで、ある時何の期待もせずと同じ古典の「遊諸屯節」を調べていたときである。「諸屯節」の姉妹歌であるこの唄に「ヒヤルガヒ」というハヤシコトバがついていることを発見した。これで歌詞もハヤシコトバも出揃ってみんな同一系譜の唄であることが明らかになったのである。この唄の歌詞には「諸鈍」の文句は出てこないが、歌い方をあげておく。

沖縄古典音楽の「遊諸屯節」 歌唱者記載なし

でいちゃよううしついでい	さあ、みんな連れあって
ハリー	
ながみヨウやいあすいば	景色を眺めて遊ぼう
ハリー ヒヤルガヒ	
きゆやヨウなにたちゆる	今日は何に譬えよう
ハリー	
じゅぐやヨウでむぬ	十五夜だから
アシュンサミ ヒヤルガヒ	

* 『五線譜琉球古典音楽』(富浜定吉著 文教図書, 昭和55年刊) 354~5頁

唄の系譜を確定する証拠は、何処から出てくるか分からないものである。

あなどれぬ歌詞の断片、奄美大島の「塩道長浜節」と徳之島の「沖の夜航」

「塩道長浜節」の「塩道」は^{しゆみち}喜界島の一集落の名前であるが、今は奄美大島で盛んな唄と言ってもよいものである。言い寄る男性を、煩わしいと、馬に浜中を引きずらせて殺してしまうという伝説の唄だが、唄自体も非常に悲しい響きを持っている。その歌い方から示す。

奄美大島の遊び唄「塩道長浜節」宇検村生勝出身 坪山豊歌唱

エーイ	
しゆみちながはまなんて	塩道長浜に
ヨーハレーヌ ナンハ	
わらべなきしゆしや	こどものよう泣いている者がいるが
ヘンヤレーヌ トヨイトヨイ	
エイー	
うりやたるヨーイチば	それは誰ゆえかと言えば
ヨーハレーヌ ナンハ	
あしはだけさまつゆい	汗肌の(肉感的な)けさまつ(女性名)のせいだ
ヘンヤレーヌ トヨイトヨイ	

* 〈総覧 奄美〉278頁

私はある時、久保けんお著『南日本民謡曲集』（音楽之友社、昭和35年刊）を開いていると、目次に徳之島の「沖の夜航」という曲名が飛び込んできた。すぐに、夜舟を漕ぐときの仕事唄ではないかと想像した。この本は、右開きが曲と歌詞の解説で、左開きが楽譜集になっていたもので、私はさっそく、右開き109頁の歌詞と説明を読み、次に楽譜の頁を開きそれをそっくり文字化したのが以下のものである。

徳之島の仕事唄「沖の夜航」山本喜多静歌唱（出身地記載なし）

1. ハレ

うにだよはらし ※意味不詳

ヤハレー

みじがどくなゆり 水が毒になる

トヤレ ヤレーヤレー

2. うりやたんがゆい それは誰がためか

ヤハレー

けさまつゆいさらみ けさまつ故ではないか

ヤレイ

けさまつがどうゆいさらみ ※歌詞反復

トヤレ ヤレーヤレ

* 『南日本民謡曲集』（久保けんお著 音楽之友社、昭和35年刊）124頁

ここで、私が注目したのは、著者は、2の歌詞を「塩道長浜の文句が混入したものか」と書いてあることだった。確かに、混入と言われればそうだが、私は、この仕事唄にこの歌詞が歌われるには、必ず何らかの理由があるものと直感した。

それからしばらくの間があって、私は平成5年、「奄美における仕事唄起源のシマウタ」という論文を書いた（鹿児島短期大学付属南日本研究所発行『南日本研究書叢書18号』所収）。結論を言ってしまうと、塩道長浜節のルーツも、海の仕事唄であり、けさまつと男の伝説は実際に舟漕ぎをするときに歌われたものだと言うことである。その理由を書く。

先ず、喜界島にも、同島と奄美大島の間を繋ぐ渡し船があり、今もその時の情景を歌う「渡しゃ」と言われる唄が奄美大島、喜界島にある。そこで、その「渡しゃ」のものは「舟漕ぎ唄」であった可能性が濃厚である。

「塩道長浜節」と「渡しゃ」は、テンポの点ではかなり差があるが、旋律的に似ているという印象を持つ唄者（島唄の歌い手）がかなりいることが分かった。両曲のハヤシコトバも類似するものがあった。

次に、奄美大島北部では、「らんかん橋節」といわれる唄とほとんど同じ節を「塩道長浜節」ともいうことを知った。つまり、かつては同じ唄だった可能性が強まったのである。

その「らんかん節」の曲名は、「らんかん橋が洗い流されて、恋人のところに行けずに泣く泣く戻って行く」という歌詞からついたものだが、

うけみじぬいじて	大水が出て
さいたなばあれながらち	さいやたなが(エビ類)が洗い流された
いしょしゃぬとうじや	漁師の妻が
なちどもどうる	泣きながら戻って行く

* 〈恵原 奄美〉185頁

のような、海の仕事唄に相応しい歌詞も残っていて、今も時折歌われる。

とにかく奄美では、仕事唄がそのまま座敷に入って遊び唄になるケースは多く、また、仕事唄としても、退屈を紛らわすために、世間の出来事を面白く歌っていたのである。従って、徳之島の「沖の夜航」も「塩道長浜節」も、ある時期重なっていた可能性は大きいのである。

どんな断片的な歌詞でも、系譜調べに大変役に立つという例である。

3. 歌詞反復

歌詞反復とは、例えば8886調4句体歌詞の、その一句目をA、二句目をB、以下C、Dとすれば、A B C D C Dのように反復したり、A B B C D D型のように反復して歌うということである。

研究を始めたころは、歌詞反復の形は唄者の気分によって変わることがあるのではないかと思ってきたが、奄美の場合、地域を超えて固定的である。その傾向は曲目や歌詞よりも強いといえる。

さて、例にあげた、A B C D C D形はいわば、下の句を反復する形のもの、A B B C D D形は、上の句下の句にそれぞれ反復があるものである。奄美、沖縄の場合はこの2つの形が大方であるといってよいが、ときどき変種が出てくる。どんな反復形があるか、詳しくは拙著『奄美民謡誌』(法政大学出版局、昭和54年刊)を参照いただきたい。ここで珍しい反復形を持つ唄の系譜を明らかにする。

特殊反復の例、奄美大島の「ヨイスラ節」(一名「船ぬ外艦節」)と沖永良部の「シュラヨイ節」(一名「いしん頂節」)の場合

これらは、曲の印象からは絶対に同系統とは言えない。前掲『南日本民謡曲集』の著者、久保けんお氏も両曲は全く別の唄だとはっきり書かれているほどである(116頁)。しかし、その反復をみてみよう。

「ヨイスラ節」(一名、船ぬ外艦節) 龍郷町戸口出身 喜入とし子歌唱

ふねぬそとどうむに	A 船の高い舳先に
ヨイスラ	
ふねぬそとどうむに	A ※1句目反復
ヨイスラ	
いちゆるしるどりや	B 止まっている白鳥
スラヨイスラヨイ	
しろどりやあらぬ	C いや、白鳥ではない
ヨイスラ	

- しるどりぬあらぬ C ※3句目反復
ヨイスラ
うなりかみがなし D あれは姉妹(うなり)神だ
スラヨイスラヨイ
*〈総覧 奄美〉42頁

「シュラヨイ節」 沖永良部島, 和泊町手々知名 松尾千代歌唱

- いしんちじぬぶて A いしん(山の名か)の頂上に登って
ヨイシュラ
いしんちじぬぶてい A ※1句目反復
ヨイシュラ
まふえむこていみりば B 真南に向ってみれば
シュラヨイシュラヨイ
アラランクララン
なふあぬあみうちやが C 那覇(沖縄の中心地)の網打ち(網を用いる漁師)が
ヨイシュラ
なふあぬあみうちやが C ※3句目反復
ヨイシュラ
あしちけぬちゅらさ D 足使いのきれいなこと
シュラヨイシュラヨイ
アラランクララン
*〈総覧 奄美〉119頁

くり返すが歌詞と音楽的印象は、奄美大島の「ヨイスラ節」と全く異なる。ご承知のように沖永良部は音楽的に琉球音階の影響を受け、その差異は際立っているといえる。

しかし、琉歌調4句体歌詞が、A B C C Dの反復形式で歌われるものは、この「ヨイスラ節」と「シュラヨイ節」しかなく、かつ次の項で述べるハヤシコトバも訛りの違いだけであり、その位置も完べきなまでに一致する。系統が違ふと言うことこそ不自然だといえよう。

もう一点、両曲の詞形を見てみると、いずれも最終句が8音になっている。私は8886調の前の形だと考えている。

繰り返すが、歌詞反復による比較は、私にとっては最も確信が持てる手法である。

部分反復も重要、奄美大島と沖永良部の「長雲節」の場合

歌詞の部分反復というのは、8886調4句体であれば、8音ないし6音一句がそっくり反復されるのではなく、例えば一句全体「くるまとうばる」が「くるま・くるまとうばる」のように反復する形をいう。

ここに例示する「長雲節」は、奄美大島、徳之島、沖永良部に独特な形で伝承されている唄だが、徳之島のそれは、この部分反復がないので本稿では割愛する。

奄美大島と沖永良部の「長雲節」の関係は、以前からはっきりしないもので、多くの人が両曲は全く別系統の唄だと扱ってきた。

先ず、例にならい、2つの唄の歌い方をそのまま文字化してみる。

遊び唄「長雲節」 奄美市笠利町大笠利 当原ミツヨ歌唱

ハレーイ

ながくもぬながさい	長雲坂の長いこと
しのきヤーレさよじびら	それに、しんどいさよじ坂
しのぎヤーレさよじびら	※2句目反復

ハレーイ

かなにうめなせば	だが好きな人を思えば
くまやイ・くまやとーばる	ここは平坦地だ
くまやイ・くまやとーばる	※4句目反復、かつ部分反復あり

* 〈総覧 奄美〉307頁

奄美大島の「長雲」は、竜郷町にある長い坂の名前である。2句と4句の反復と、4句目に部分反復がみられる。実はこの反復は、この唄が上下句ともに同じ旋律であるために、実際に歌う際、6音を8音に近くなるよう、この反復で調整したものである。実際には「くるまハレとーばる」としてもよいのだが、奄美大島の「長雲節」では、このような部分反復が圧倒的に多いのである。

次は、沖永良部の「長雲節」である。同島では、この唄に「長雲」についての歌詞がないので、「ながくも」「ながくま」等と表記するが多い。

沖永良部の遊び唄「ながくも節」 和泊町手々知名出身 松尾千代歌唱

アレ

ていだぬうてまぐり	太陽の落ちる間際
ゆなきハレしゆるがらし	夜鳴きする鳥がいる

ハレ

ゆすぬうえがなちゅら	他人のことで鳴いているのか
わうえが・わうえがなちゅら	私のことで鳴いているのか

* 〈総覧 奄美〉118頁

ここでは、2句、4句の反復はないが、4句目の部分反復だけは奄美大島の「長雲節」と同じである。ところで、この歌詞をみれば、これも奄美大島にある「太陽ぬ^{ていだ}落^おていまぐれ」の歌詞であることに気付く。さらに興味引くのは、奄美大島の「太陽ぬ落ていまぐれ節」の歌唱形式をみても、部分反復がみられる。例をあげる。

奄美大島の遊び唄「太陽ぬ落ちていまぐれ節」 竜郷町中勝出身 川元百合子歌唱

ハレイー

てゐだぬうてゐまぐりに

いしゆてゐなきゆるがらしい・がらしい

ハリイクリイサトウーテキ

かながういがあるかい

わういが・わういがあるかい

アワレサトウーテキ

わういが・わういがあるか

* 〈大観 奄美〉524～5頁

太陽の西に落ちる間際

どこかに止まって鳴く鳥がいる

恋人の上で鳴いてるのか

私の上であろうか

※4句目反復

奄美大島でこの唄を歌うとき、1番だけ、節は同じだが、これの答えに当たる「時や物知り（占いなどする巫者）に占ってもらったら、どちらの上で鳴いるのではない」という意味の文句を歌う。この部分は省略した。

ここでは、部分反復が上の句下の句にも現れる。

いったいどう考えたらよいのだろうか。私には、「長雲節」「太陽ぬ落ちていまぐれ節」もかつて1つの唄としてあったとしか思えない。

そして、もう一つ、どうしても無視できないハヤシコトバ、ないし相方ハヤシの文句がある。沖永良部島の「ながくも節」では「チジュヤハマウテ チュイチュイナー」（千鳥が浜に降りてチュイチュイ鳴くよ）という相方ハヤシが歌われること、そして奄美大島の「長雲節」では「チジュリヤハマウリトティチュイチュイナー」という、これも相方ハヤシの文句である。（〈総覧 奄美〉132頁等参照）

正確に言えば、奄美大島では時々歌われるハヤシであり、沖永良部ではこの唄に付きものの相方ハヤシである。

ここで思い起こすのが、琉球舞踊の「浜千鳥節」である。次のように歌われ、沖永良部島の「長雲節」曲の印象とそっくり同じであることがわかる。

沖縄の踊り唄「^{ちじゅや}浜千鳥節」 出身地記載なし 安富祖竹久歌唱

たびやはまやどうい

くさぬヤレふあぬまくら

にていんわしららん

わやぬヤレ・わやぬうすば

チジュヤ ハマウティ チュイチュイナ

* 〈大観 沖縄〉566頁

旅は浜宿りをして

草を枕に休む

寝ても忘れられないのが

わが親の側にい時のこと

この唄にも部分反復がある。

そこで「長雲」という意味だが、徳之島の「長雲節」（一名、烏賊曳き唄）などでは、漁師

が海に出て見る帯のように長い雲のようである。(歌詞、歌い方などは、〈大観 奄美〉629頁参照)。ここで沖縄の「千鳥節」の踊りを見ると、浜での仕事を彷彿させる。私はここに登場したどの唄もかつては海の仕事唄であったと考えている。

4. ハヤシコトバ

「ハヤシコトバ」とは、唄を囃す(元気づける)言葉の意味であるが、本稿では英語訳の「リフライン」をとって、ある唄に繰り返し出てくる歌詞以外の言葉を指すこととする。従って、声を調整する「ハレーイ」とか、歌詞の音律を調整する「マタ」、唄の内容を短くまとめて歌う文句などもこれに含める。

ついで、「相方ハヤシ」についても述べておく。いわゆる、大方の日本民謡にみられる「お囃子」と同じで、歌い手以外の人が歌の合間に入れる文句のことである。奄美でなぜ「相方」の言葉を使うのかと言えば、奄美の島唄では、ハヤシ専門にやる場合は少なく、複数の人が歌い合うので、自分の唄の相手が歌ってくれるからである。

いずれのハヤシも、曲によって、入れる文句や歌詞の何句目のあとに入れるか、最後に入れるかなどがきちんと決まっている。また相方ハヤシは、歌い手の歌詞の一部を、そっくり繰り返す場合も多い。

ここで、ハヤシコトバによる系譜調べの例をあげてみる。

ヨнна系ハヤシコトバ、沖縄の「かじゃで風節」、奄美の「祝い唄」「八月唄」など

私は昔からヨнна系のハヤシコトバを持つ唄に注目してきた。はじめは奄美の唄ではなく、沖縄の代表的な古典の祝い唄「かじゃで風」に注目した。次のように、歌詞反復も複雑なものである。

きゅうぬふくらしゃや	A 今日誇らしさは
なをウにぢゃなたてゐる	B 何に譬えよう。
ツイぶでイをウれうはなぬ	C 蓄んでいる花が
ツイゆちャたぐとウ	D 露に逢ったようだ
ヨウンナ ハリー	ハヤシコトバ
ツイぶでイをウれうはなぬ	C 3句目反復
ツイぶでイをウれうはなぬ	C 3句目再度反復
ツイゆちャたぐとウ	D 4句目反復
ヨウンナ	ハヤシコトバ

*『五線譜琉球古典音楽』(富浜定吉著, 文教図書, 1980年刊)1~3頁。楽譜から文字を拾った。

歌詞は琉歌調で、歌詞反復は下の句反復と言えるが、3句目が2度も繰り返されているのは特異である。

次に当然奄美の唄に注目したが、ある直感から、奄美の行事唄というべき「八月踊り」に関心がむき、特に儀礼的な唄のなかに「ヨンナー」系ハヤシコトバがついていることが分かった。

奄美市笠利町佐仁の八月唄「祝付け」

- | | | |
|-----------------|---|-------------------|
| にわぬしょうーじしちゆて | A | 庭の掃除をして |
| わぬまちゆるゆるや | B | 私が待つ夜は |
| ハレやしよらしよらしちゆてい | C | やしよらしよら (意味未詳) して |
| よわておせろ | D | 祝ってあげよう |
| ヨンド ハレ | | ※ハヤシコトバ |
| やちよらしよらしちゆ | C | ※3句目反復 |
| ハレ やしよらしよらしちゆてい | C | ※3句目 |
| よわていおせろ | D | ※4句目反復 |
| ヨンド | | ※ハヤシコトバ |
- * <大観 奄美>176頁 相方ハヤシ部分省略

「ヨンド」というハヤシコトバが付いているだけでなく、歌詞反復がA B C D C C Dであり、「かじゃで風」と同じなのである。沖縄、奄美どちらの人の耳にも、両曲の旋律はあまりにも違いすぎる。しかし、歌詞反復がこれだけ一致していることはただの偶然とは考えられない。

竜郷町秋名の「平瀬マンカイ」の唄を見ても一緒だった。

- | | | |
|---------------|---|------------|
| たまぬいしぬぶてい | A | 玉のような石に登って |
| ぬぬゆわいとりゆり | B | 何の祝いをしよう |
| ハレ にしひぎゃぬにやだま | C | 西東の稲の魂を |
| まねきゆしいろ | D | 招き寄せるのだ |
| ヨンド ハレ | | ※ハヤシコトバ |
| にしひぎゃぬにやだま | C | ※3句目反復 |
| ハレ にしひぎゃぬにやだま | C | ※3句目再度反復 |
| まねきゆしいろ | D | ※4句目反復 |
| ヨンド | | |
- * <大観 奄美>122頁

「平瀬マンカイ」は、奄美の夏正月というべき旧暦八月の吉日に、浜辺の二つの「平瀬」と呼ばれる瀬の上に、役割を持つ男女が数名ずつ立って、この唄を歌い、手招きをしながら、海のかなたから稲玉（稲の魂）を招くという行事である。

この唄も「かじゃで風」とは曲の節回しは全く違っているが、この一致は偶然ではないであろう。

ところで、ある時代、徳之島秋津（現在、徳之島町^{あきちゅ}亀徳）の坂元神社が奄美各地のみならず沖縄にまで知れていたが、その神社の儀式的な唄が今も「坂元節」として、広く残っている。先ず本家の唄からあげる。

徳之島の「秋津盛唄」（通称「坂元節」） 徳之島町亀徳出身 坂元虎雄歌唱

さかむとうぬいびや 坂元神社のいび（神名）は
だんじゅとうゆまたむ だんじゅ（意味不明）響き渡る
ゆゆぎゅらがちゅーむとう ゆゆぎゅら（意味不明）が一本
ハレ くばやみむとう くば（ピロウ樹）は三本
ヨンド

* 〈大観 奄美〉164頁

「ヨンド」は付いているが、歌詞反復はない。これが広く伝わっていったことは間違いないが、奄美では先ず「八月唄」に取り込まれた。

奄美大島の八月唄「坂元」 奄美市住用村川内 城 利文ほか有志歌唱

さかもとのえべら ヨハレ 坂元神社のえべら（「いび」の訛りか）
だにそとよまりゆみい 何処まで聞こえるか
ヨサ ヨイヨイ
ゆいぎよらぬちゅむとう ハレ ゆいぎよら（意味不明）が一本
こばぬみむとう こば（ピロウ樹）が三本あるよ
ヨヌヨ ヨサヨイヨイ

* 〈大観 奄美〉217～8頁

ここに出てくる「ヨヌヨ」が「ヨナ」系とみなされる。歌詞の後に歌われ点でも一致する。さて、沖縄はどうかと言えば、古典音楽の中にも入っていた。

沖縄古典音楽「坂本節」

さかむとうぬいびやヨウ 坂元のいび（神名）は
ウネクネ
だんじゅとうゆまりる だんじゅ（意味不明）響き渡る
ヨウウネクネ
ゆゆちゅらがちゅむとうヨウ ゆゆちゅら（意味不明）が一本
ウネクネ
くばぬみむとう こば（ピロウ樹）が三本あるよ
サユーヨウンナー

* 前掲『五線譜琉球古典音楽』45～6頁

詞章を見る限り、元の唄がかなり正確に伝えられていることが分かる。

こうして、2系統のヨナナー系の唄をみてきたわけだが、系譜調べにおけるハヤシコトバの重要性がお分かりいただけたであろう。

おわりに

まだまだあげたい事例は山ほどあるが、紙数も限られているのでこれまでとする。特に今回は「口承、書承」の問題に一切触れられなかったことが残念である。私としては、これからも各地に同学の士を求め、ここに扱った方法を用いて島唄の系譜探しをしたいと、思うものである。その一助となれば幸いである。